保元物語 下

特別
へ12
4581
3

保元物語下

[illegible]めされて中院の
大将入道内大臣実俊とめされてく
為義ろくいるるほどきてはりもせられ
ろくまいりたるのくかんどのやうにされろく
さうの天子ろうのれとしたさひろうたものろ
こ南原の仲成ごちうもせうもこてのちを
とはるるの二こびうてぬひんるり
とはりもせられくこうざいとるるめうまき
てとうこもうもうりあるふしあ義
入道が武勇ものこうろうありきうけく

院がこの大将軍にてそうじたものの
ゑがくこゝろみていとゝもを卒あやまり
出家をとゞめくびをのべかゝみんまま
いりたんとすゝめられこんかくろを
めしかりしたるのまゝにうり八海のかたま
ありいとかるのくゝ海ゝうゝへきとゝ
これはまことにこゝろいとうまこめ者ゆゑ
ゆるめけるとゝ少納言入道ゆけっぱいさ
きうゝでしゝもそんゝこびやうの
ごんゝ人数をつくしひせもいるるあ
ゆゝりくのけゝとを聞くんゝこれて

いくさ海のひゝすいできゆるんや
ゆゝれゝはきいとれゝうとそこれめ
きれてきこれゝうゝ者馬者家弘
ゆんゝやゝこせやとひろとは和泉
者集ゝけ治くゝる原ゝしてき
ゆゝてゝゝ者集尉河弘とすもゝさ
ゆゝゝして同河判官ゆて六条ゝゝ
めくきゝてゝゝ原ゝるものとけの遠志
ゝゝやくゝ西感次男ゝまゝさゝゝゝ
人伊勢国ゝゝくゝやゝゝ一ゝゝかゝ
居ゝゝけゝゝゝゝ義朝とゝの

そきてくはとさてけりとも清風
とはなくこいのちりかはりけそ
らんとはひて出こりけるを清風
とりふちとさせんはてをりひて先
ちの色いとのとけとりけきりてん
ぐり保元のいさかに武ろ四人
ありはちとくはいるこさせらてそん
子にさする義朝よりとくこれ
ちいちの義人のくびとを移つき
うはりせられけりさて辞しは
せくはいの他人よりはかせらもんとの

アとれくちくはよりとをある
かりて鎧田次郎四きとを移き
とせくせんくはよりは宣旨
はりんくはてちのちひとくこと
ちきやくさいのそれ一と地とて法を
とりとんくせんくとりとんなしい
いちくのそれとるあ色くふう
色ふとんくいきふりて地かゆりとん
いふとくきくれくさんかりくは
けりふしくとくれかくそちとと
しいをるいに方八とんりくをひ

だろうとやうみてとうそていうれ岡の
くま井とむさうくんとうとうくみ
ちをとうとうとうとうぐうみうやうう
おほくくありやさんやてうてきて
うとせのうひとあはつこのうまかさ
しうて色人うよかけなんうとうも
れてうしうひていうせうあうひ
てはけうやうあんごちうくうくそ
うあうとうれごうもかしうんごし
うくんとあうくんいうもごさうさいごれは
ごいあんうごしかうりのういたうう
ちうごうとあうくうそうせうとうという
でうひうくうせうあひうつきうとけまう
義朝公のかうくんふあいりてかうれあ
ふうくんで後ごうれおあ軍みてはうと
くうくうつうはつこあごれかごうとて
頼と行つきうせんごとうれうつ
と義朝ごうくんこうのうやうにかうくまい
うせとはうんごくうやうに尚河辛家の一
はいのくうくんごやうくうくう氏うら
といごとうくうやうとうす石の中はせ
いうやのあうみてけうくせはひい

りんどう事ふんぐんの海を過ぎて
きんぐひぐしつるまちまちの住居
をうういてくいたんたちのまつ和尚
がつるまもなくこしわらわらいの西に
るまあるべき食べくやくとやきれた
へ道をなおあるもしろしひすひしく
あるれんのまふまるすばらしかる
らしそなけまよるばくんくれ
ふうるふ新んぐちるるみちとたち
らひるつべきうるとぐくもうまて
食べそくんすしにかるべあるく

うまとして海をとうぐてしろぐひさ
まふのりあるとうまるさうふつるの海
つくうるりとやきれるまい入方収
く出くれるうさるひるるやけげ
よりひくまばい出やりくあ
と鶴西次ぐ白米のうるるきを
まうるてくくりせば白るる
ぐりまふひぐのくへゆぐ
て米みしるやれ人のきて
ゆくんとあるるくうまるれば海
野次くう義通ぐるきくやふくと

かりやくむろうがあまごいろうよ
まさつてゝたりたりんとろをき
らんと思ひくゝ大方とあさうけて
ゆうろ居くゝろうさぶが種田ヤ
けろはやこのうもぐどのむすいるどの
さぐこのこあてうもそせらひーよ
里塩東さぶいどもそれらい懸れと
ちうとこのこそてもうのあのやろう
されぐ入道ろし紙ふぐちうり里もと
ろうあ切りひさいつせぐそれたきて
此事と入ろれるちうせうそもうつて

あくくやうてうなひうりせんこ
といくばけころうおぐてのぞな
みこうあうう貴かうくとやうて
ハ切りすうあくくふ切りせられすん
みはう金佛ぐどとけうあうぐどと
やうれぐ入道切りきけぐろふ家ぬ
ちきふくこいうにいぐいうそある
のこぐなのりげるいひけろ事ハさ
れぐいうとそあうりうあうれ
ぬ朔ぐうくうあひうものとそのぎ
よけきうくいあぐふいきぐゆ

六人のおとこさうみあそぶをはた
ちあういくさにせざるべきのの
きこえさんとせんとて六年みあまるる
今ぞしびとどきこらほんまに心ざ
きぐふあるあしばさんやうざいとた
とうまでこそすくしもちて一人ぶいの
ちをとらずぐらをとけざうぐき入道みち
ふをいうていくさふうちうちうこば
ケんこうみとーめんてるぐら義朔とば
なとけざうんをれうるすいへんぐいのち
みとーんくらうーこうとどくとくぐき

よ地やのさんぶ移ふいかりいぐうりる事れ
うちりまるさるさるすまりれ移んきるもう
しもきやうふれ移んきるもうふもきやう移んし
きふれ移んぬもしてうちくのりけい
きるもじやうとあうれきるとうもるもう
りうけとはりびとやうぶれ移んとるる
ふれやとれりあぬするれぐちくとるもだ
じうまるじれりのてきれ中ふるぐて
みれりてきもんずるへ通ぐきるもくき
うかうきうきはりけもとどけんざい
のちぐうびとまうんすまりいうとうこ

ゆくさうこうまでもくしをうき事とれ
ども世のものがたりふるなりんずる
事をうちうちとしるれば入るこころにく
のちうずるものとものこころまとをせんでいるぶ
さんれずんぜんぜんれりきまでもいかりひく
ふちゆきあまいばくみてもらぶる
いぶこころれてきまもんるちうなりび
六条院のこころもくこころぶこころぶ
ぜさうきさるぶこもやありこれなびん
よりばゆうるうこうれどこうれらおさ
れるれいうまのうみかくとるく
入道がかくこともやひるくいうれり
ろさうふつつひるんくうこう帝ホ一人
ともやりひるふ帝ホ一人
つてきこゆうとこさいごうれいふ
事とばいひとくこうこれこさもの
かうぶてかもぶこうこきにくわ
じうれいこやとくこうやばゆまを和
もあけいこあうしのこうこの見
じとて京中れとこのあり
うてうとくてうぶこうこいんをこう
とうればこうくとて車

のうちうちもれたる師のこまづ
あかうれうちぐ　よりうまでとぶく
きこえいけるのいのちゆまね
のやあうもうじ人つんとていうまの
いのちとゆさげんぐ　きんのりん
ちと人さいとふちてらびとと〇らう
れだふもいきてもうひるさ二日のいたら
ともたとうばやとゆりぞかいと
むや入道いうかぬるるとお
りふりのうとあまとばるふんて
あるいはせ十六人までりうとれぐ
これうとも見ぐやとゆりへいまう物ん
うまどちらうとよりびとそうさぐ
とれぐのひうとれぐとも為義公
いたそんうりうと代いはあ田のまん中
うう義代いはあうとう頼義うまご八幡
太郎義家ぐ四男六条判官為義さ
のあんぐうの大将軍ふもみぐあ
神ふたうされぐとんふよりびとみも
じてとさうう神のうとうとて
まくふみぐいこびほとうきうさば
のうんるけ井てゆうやうるひ

敵とふりてくびとられてもつ
ゐまうせんのゐんぐわ
くわのくまひけもかぶたちとゐ
こてはうちちぢばきあわうさすがに
さうでんのこうれくびひとこうん事うれ
ゐてそこれうりのよこちとこうすを
ちはけこうりのあもちあてこげ
てうどこちうちうれゐ義人をとし
ヒこうびきこみこういふうもぐはう
まつあとそこの後ゐん有十人ゐ
ゐこるゐ給へくびい前へそゆちふけるかゐ
ゐいそぎ神よはこそこうさして義
こうふ見せこそまつるもあひのみちれ
きいはこそかゐまこうゐ義人をの
くびとゐ物こうはこうんと国衙の
ちんこうんをもぐひくびとぢこうんを為
うぐくびこ問ゐこうとこうれぐ義
朝ゐけうやせこてたなこうりう
くびもこうこうにたりくこうん
かぐぐ三こうこそまつるけこうきこそ
げはくこそこゐくこゐけうやうこ三ゐ
ゐ義人遣うけどやこうこうふやんぐ

くぐさんれうふんぐちぶゆくごとい
いりいるものるれいれいぐきあうふ
しぐ出てこれとれおかせれ
をぐれ次節しみちこ言のきとあ
ひつけくけるしける大をれとくめく
清水の節よしぐあひそりこんれ
ちけをどもこんぐしようやぐりてを
ちふくるのちをのゆもとをぐ
ちるみいさぐぐまるゆのゆくき
ぐあんどれるくるひいぐてこれ
るものをて山ふ塔ふよるとる
みうんのちけうるうくうめとを
出これよるしにぐもとのこひを
りこさとしこれちひてこれとくろ
おりくのくびとくる弓矢とるるひ弟
姫ゝんのうあとにうるぐ弟のこるす
こしちをくふあくとそ稲んん
とをんとるくまんくんくきう
をくるのちるをんをとをもたりぐ
かるまでこれるるをいるとを
うりんとれうるに地よりぐとそこをお
かをれけをいこるぐこあんのいけの

ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ
ちくぜんのくにのこうりやうのしやうにんのもとへ

いづれのふねにもとそ十三ねんしい
あるときそ十三男ハつるのあとそれを
ものをいふすまとて七ふなとふなを十三ふな
ねにとりかいひけるちごせんいれ
ものつけとゆどもうしほみづれのせの
するるれいもぐ見ものいとせあてそ
いづいと見ものいとせんどもうれさ
よはせんうちけやうしのものせのを
すめけうぐ海ものわらこせんハ情へ
ものうちうづいもぐばけうせんせうハ
めるれうせ人すうらいうありりさ
むどもうよもちうしいくせくとうの九よ
なり寒のわうぐうこるくふそあり
うれくいありめさんどれちごせん
みよたれさいいせたんとの九やうく
こそありめさんどれのいせうとすす
ものうれだこれのりてうみちとぐも
ちづくよもいくけやとそくと
すめのれぐものあたこちづ
ものこものけりうそさくに
むさまなんめうれうさのよ
あふうちうこありこ所いり

もきのけくもつてとときすくしうせ
さいるかりうえのうきとのさてれうちうり
たりまいぞいたちはせんいぶふ
わりてせすふぎといひうれいもうぶ
ハひかりんとひざのうんようき
いぐきこうこかきすぐぐ海ことよいいぐう
こうりうきれんぶきちぐぐせんいこうの
とのくれうけ給とそ鎮西ひかりぐこうり
さいうせねあふぐぐせんうちふあまき
ふみえとやしのうふくきれうき
つさいうせてはうんぐうちとうていと

これそうるひいうせうんずうふ
するもれがめとるれ拾をとれく
とりうれば地されき人ここれときて
身こハいうあるとれうれれれれむ
孫はぐさせんとそうかういうこうま
さいうれうふたとけるそもぐ
ようさうう海つり義通とちぐうう
てあうとはうはくりのれるみぐを
ぐ神はこぐひいうりうるとれよ
なうはうりうれぐあふぐぐせんうちそ
地とれうれ若というせれ

ごとくなれいとなもとくもとれく
ぬきとれけまいるふはそのおとこ
ぬすまるふりりう系のなかれあたれう
ものへんどもいしてもくうけ毎りく
ごとくうりとくもれわくはんとくけ
給りんどくんやとくきけ事ふてくて
うんどくうりいづんりてたくけくも
まんくりてんくうやくいひくれかれく
くうねきくてかくまはすかきいひど
くくふりてたくくはくけくまくうづく
六年にあきくまくまくちくくくまく

祖のまくけまきんまれくうれくくそ
くくんくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
ごくふくいづきくくくくくくくくく
まくまくはくくくくくくくくくくく
くくあくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

いひけつ和とくだりしひあるとせよとそ
の給ひけつかやうの事ときて申さ
まさ人ことごとくふるきけまとば申
つれいらつしげめしくすひそこ御
ぞんこちいふなくれいつしまれいた
もくなるおあとれこまふ名ぶちい
きこまきのひぬたのめこそだのと
かりべきかうのれいてこさうりまれと
こるつやう一本をまきやうこと
じきばこのこやうをしてもちうこと
みさどひあうこみ通ゐみどと

ぬありさ海ひんてよとと人まるまと人
ハうきてもうひまこさまうそうこ七十
八十みくきてきたこどもこてば
こうなしいのうれ申ゆきさいおれば
申ぞうきもこうこうけのこれ
ととるのうこ地ゐ白ふ
しけうふもみふ人こでとこば
ア人ウ人ウ人にそ人ばあの
つこうしあれみ源人うあとれ
ゆ海ばつううれあい吉田の里良
天王寺ふい関きの白ばこうこうこう

ゆとりなんのごとくにぜんくられうこのみ
ぶれくあるはげはげしくたゆひ
てくびのさりのあせともれぐつて
のくまへ宮人のめはきくふを
ちくりくあくたゆひうのあせ
とれひくうう月のうしやを
いとどうぐうとろけまばうぐう
ちくりみすみくうくまきを
ひくうひくゆきれきうなきき
ゆうんとゆりへゆむしくねなみぐ
の神のあまりてんくれんあり

とうさしくりふ神とうぐりうう
ねくうねそぐみくうよみくまひ
くうまひくれくそくうぐきうれども
ゆきうきくりのどうんくうきくし
ふすれすぐいふもうりあぐくれいわ
きくぐのりうくれくあまいうう
みくさうけくあうとうあうやけう
しあれゆくもくれくもひていひけふ
やくくりめてきざくゆきう電
のいきりひありくうくふありて
あくくこうこうみすぐれくりとふ

かんりんあり源氏八十五ぢまでを
んなうなるものしんよりまつまつぎ
かしまこぞらのとしはりへ千そ
九七ぞかりちいまりぶけぞんめいあり
てうちんのうちにはりむしきうはんん
はいうまれてくとうちうくちちの
食はりてふうさがくんとうはりまで
きうきそちちこひーをふまむ
うひめはうさにもとあうもこちを
うそ結んかりをうして為をあるゆ
ごうくけうしもみぐにならい安東

あやまうくうにはちうとわうとひ
とにみちよむしんもうとりさいむう
ひるうさむしうちうちごがんいうい
海ようとんきうくうれ海こ
とくはりひてあにもむひてこくく
ふはうけのうるはけうたのうち
こそむぐんふれはつれ義通よ
めときこんあうもうれたるぐ
のうくくうちとひきそぐめくく
うちうちばきうれたうあのはう
ゆ天皇ねぐうびちうぐいくよまん

まそ地ちふけうめれたてつとうら
くむあきさこびひとあへこと
まろびこをたそるさうあむそ
ことうるれ地しわれすうとさい
ざこうあきさるてさこふ年
月ひあこるれさそひけめで
とあうりよ地さびこばこびま
きてそ地こたびとまへふらび
あひたまこばせるなうたるれうこと
かみもちうりれじまれむあり
きあまそもいうらや男ひうん

むさうせく神そのこうれみふん
あみこうあふむさんやれを
きとけきこそこうゆくきよふるう
こうりまふらうくのこびの
うまこうあとうこびけまてゆうんを
ぬそこればよけるいひうれとさ
ぬう神のこうそうれてうみこそ
こうまこうこうこれあたうとういこう
ひうこうけうひこうこうい
みあこうくこうあまてこうけうこうび
とばをけうまそ地こうどれめのこと

ぶひょうびょうせくまさとふ年月
のあいだきこえそうめどもちうを
よりあすのりんぜんぐあいめんてい
ごしやうとうこうらいあみとはぐん
のうげきたはりんどうとあひうて
あくしゅうのぐさあまんのみなる
しやうふいひとうこうてうらめのて源八と
ちうくうひくいふ源八弐年月をふ
事は坂りひてもうちけうすうてむ心
ぶんうれ坂ちれ坂ちれ坂ちうたうい世
めてあうんどうむと思うけう弟

うもまでうてうあうにあとみを
つうすうこて源八ぶうをとうこへく源と
ゆうけまこい源八へもうみぐとけうへく
ドけうぶ山十三ぶうあひうぐまたうきい山
ふうきうこうこうこえうとのうこ見けけうい
らをていうドいうぶうきうにぶうきあううあ
ううんうあうドいうをていううれた
のうこうんぐきうこぐさいうこのゆうとけうま
ゆうぐしゆうて坂ちうれうひうざみを
とうとあうてうあうきあうちうドいうこれ
きうでうとうて坂ちうどうとうこうひの中

みすけ入て舞んぶ
とびとみてぞさう
ゝとあきそうゐ
ゝむざんるれそ
がめのゝふいきれ
りとゝゝれとゝ
むゝろとゝこゝろ
て人ゝそあもゝ
きたてゝてゝちは
しれあびさいゝ
りるゝとはうゐ

ありすれゝ
ひびあゝきゐも
とゝりひてゝ
かゝうきめれう
ありけゝぞゐ
けきはいゝゝ
るれあびきる
ゐれゐゝ
とんけゝそゝ
とゝて也風ゝ
りてゞこゝ

ろかあさ海しけるつれ者きあてを
まとをとそいづくゆくゆくがきぞいり
ちゆくとをとれとどてゆけるゆく
ゆくのうちんとをいとゆをせ
うずうずとそらびるいづくひをとるぞ
さづくゆりをらゆくをとをつくをせ
うあいづりうゆゆくふううきを事を
ゆをさうれはゆをあをとゆりをせまい
うをうまゆをうをさいをいをゆう
世ふうかうのはくをばをとゆづくはをい
ゆをうをうをんゆをうをあるゆをうあ海
うんどをいのうをとをさうんどをうゆれ
しゆをさづいをまういをいをるはをを
をうをうをゆくゆふうのうをうをんの
めをれをいをとんをたゆをる年をふをを
ゆをゆをとをゆるくをづいをゆうくく
をれいくをうをゆゆをけうをのを
をゆうをうをゆけうをををいををんゆう
ををををををををををををををををを
めをををあををゆをゆをゆをゆをゆをゆを
なををあをゆをゆ義通をゆをををををな
ゆををれををををををををををををを

ぶすまぐるまにて又山やうとそうもんを
のりふねにてまつ山きんれいをれ
ぎふのうらまつすまばとそうんぐ
じへとそうそうぐ野いはくりの
ゆいごんをぬうせて六条りうこうの
三ようさいりうこもの毎日家いはぐ儀
ようはんぐわいしいひんりあうん
所ゆきてとそゆくりぐるあうぬぐうそて
ゆいりあう義通るうりはりそしこま
ゆいはこうとうきとうあり義通はい
しちくうりうこうれ神ぐはず神

とうりあてるうきぬうりたてうん
ちはすぐうとうんをきぬ
そうとうとうたりはいはくりうれを
うしあげくいふたぐれるふ神ぐ
とれうさうあうりあうて義通
濃とうこうりはふ入道あのおんぐ氏
大将軍みてはりてせはいううれ
とぐのぐまがうぐ
うけうあうりあくうたがうさい
うりぐくうしいあれりふ
みふさのう毎晩山うてきてきさ

物語ゆゑなきさまにて
ものしたまへるを
いかゞ
毋屋山
ゆゑなくてきたまへる
ゆゑなくてあらんこゝろぐるしく
かゝるなりてこゝにぐるんくのはぐ
どもをかくしてゆくこゝろぐ
とこゝろうしたちのゆきこゝろとゝい
ごとてなりぬまこゝにいたりぬ
やんごとのすゝひりごとに
ひらきるすゝめじ
はるきるまゝ人をまつて八幡へ
さいりはたらのたぐこゝろやへ
ゆきられさんくとくこゝろをせんくこゝ
そやつまを大井ハ源氏ともうんとい
ぬはらいゝしこゝろけるゝゆき
うきりのれまでかゝるふ八
情へとさいりはたんさいてゝ一時も分
毋屋山くまゝ毋屋山こゝろやつまてゆ
こゝてゝばゆかりみちゝめるゝ
はゆきうきりのどゝれもさいゝ
ひこゝろひはゝとゝゝはゝれゝとん
しゝをびいひとゝもゝをゝこゝ
見こゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬさきみてはりひくまいりたるふを
めていひとりとゞまりたる井よりあと
をそゝぐとゝいふまでハ分めいそんてよ
し無量山とゝやつたるこゝろあい
でくるりくるやうあもりひたゝ光
無量山ゆきそひるしきあるれ
いとりでゝんとはりかゝでれきまつ
うつかのひとりひくとれかりあれと
ゝ氏はうまうあ系れとゝとを
りりすとゝのきうとたくあを
ゝやきゝゝりめてゝとかきゝとん
さゝくはりへい無量山（むらやま）ゝもせんるいは
いゝゝとのくいちゝてうゆきま
きゝとんるもめゝてらもうゞ
くれいそゝあさとうはりあそゝな
ゝりあゝてきゝゝとゝくやゝとん
どゝいりありりのきゝゝそゝきうん
ふりのまにいゝどゝきうるの毛氣
ゝもきゝゝゞはりのまにいゝどそ
ゝもあうゝ道のはきごゝんるれゝく
ゝゝゝゝゝゝゝれんゝせんれまゞ
うかゝゝぬ信（そう）のりうゝとゝゝせん

わたりしかりそんれもぞ
とそうさきしやみうふどこひくを
こゆひきいらうこときうあきるよ
ぢくこうるけくふぢんこぢうふ五こう
してあれそこんそいこうまとろう人一日一和
とろうふ八地くこうあれおりひあうこいるる
わうたなふ米うこうひにいあこそ
地りひこうれこまいのうれあうんうさ
ア五ふ人くの米ふすうれ地りど
入道あう学こふうるうんどもこ千ま
あもいとこうあまうこあれ
のこうとうぞんくいあうこいふるうん
ねとこ地りうこうこうれうんもけるめう
屋こかうたあも地りあくいあるをと
ふ見弱んふうとれうひあうんしと
と地ぢくしこうれいうくうこうとう
ゆんうれいこうでゆでこれわれうみう
ゆうこうんと地りうあぞとそあうこう
へこうこうのうんいれとあんけうれ
ぢで川ふるうたうこうぞうくそま
ゆうてうちぐくふゆあういあふふ
とんあひのうこうしさこうあうじめ

いらかをしたりたる山やまさ
きごとにみこしとどまりたるそのほと
とをとゝのへたるもとらまちふるまと
あげいのちとうしるひとゝりんおの世の
中ふしんをやうつくさぶらんぎ御所
ゝいごろとれさるぬとくてこそまち
くはつるまをつまれけるのきさ
のかさをつみ人のみとをせすひ
てはるげらたまとうくいの方ふとう
ゝ多ぎりゝうまをきれは
出家してかぐらいとそこをひそ

さつてさいしやのひはるれは五一人
ゝうふかりゝまをひきそひそて
もをうとをぐうゝよゆきあふこ
ゝもいさうはと六道(ろくどう)をいの
きのうふうとりしきのひうらん
をれもをりかうこをやこをうう
ゝそをうふれ物んをるもをそて
はかうらいとをうひそをまうを落
ひうんをれ四方とむをくるをた
まうて天童(てんどう)のはゝあをきを
四年ゝそやうんとをしるをんく

ゆきあふさま
ゆくすえをとげてもやんごと
なき人のいきのをとめたまへる
ものをくはえてこらせたま
へるなりやとてやどり川へ
とびいりぬるとぞ人のいひける
世ふるまつりごとの
きりょのうつりきてお
ものしたりしよりこのかた
とのゐ人とものるけいやどそも
ぬうとぞ人のいひける

さてはかくもうしてきこえてそうしひ
ごとをもとめむもきこえ
ものをもとめ人にはそめぞ
ものをもとめしたりとぞ
きかせたまふ 保元元年七月廿
日左衛門督ぬしのこのかたにて
宮使一人ときこえ人をはつかせ
たまへ 中宮使 これを 藏人
なりとぞ 義賢とけ
ものやうの国をのあとにて
ふうとしたまへ 野の御

のこちらもじ（八事三町より名
をつけ）ましくごろうけ（の）
よゆふぐちまつのりとあてきき
そそぐりけりとてこれ
をぐいとぐふたこそうちふ間を
ことのこちらそのあるとあとて
祝ならくしとそそぐうちろ
なるきさ一日ふたる者人きこ人
ちちたたねふぐとそまさい次
男ちちかどちちとぐうりうすとそ
大将ん丁年三百年三男左中将ちうが

とそ十三歳三人ん子をとふて祝文申
けねへりとせのひろうる世ちうふ
ちりぬた寿ちまりしぬちにきみふ新
使ちちてさぬのちぐいちりも
ちうりうけ海りいちうよ
ちりあちうへいちう人ちたりあとい
祝ちまやふいとぬとちりしく
世家ちたちうてう家のいちうと
たとかりて前三人がぐいちもこうひ
ちうんとまくくりとせちまひろれど
前家ねりりせられちうた者世ちさ

よのちかいとのくちおしきことは
そかくうんてんまつりごと
ふかきことはいさんめもなかりしを
ふかくるふうふのことはけうさた
ぶいこのせいいんもうたいなる
さまあくまでもさきをやりひのふくめ
ひつくわうくんをくとりてとりあつめ
とはけんとはおりめしやうの文まい
こんぐこそきれうしかぐこれ
うちともくこうをひろめようきたり
しかりうちてうの豊めいひん人

あをいこんのそうりょうしたりしが
刑部卿とゆうさまれて二てびの恵和の
まくにのかりしたりもあるべかり
さうとも春日大明神のとてさ給
ぶつどをさるもうしのことけざうん
とそれるみぐとうさもものひろうこ
のことばとばくくてまうん年と
ぶつどるれど高野山を給
ど同せうの兵ふけりて義人た
ひ平成頼めんるもりてを院
へもそうふりけるあと都のりん

出さんとのよりてのぶよりとゝのれば流
れをのものすゝうを船にて出ぐ
まゝのけうの車をまてゝこゝらよ
りをしいてたゝ
ぐさしひてはぐ
ぐりめるゝ同井
こ日新渡仁わらとれと出せるひ
てこれゝぜんぐ春かぐこゝまふゝれ
ゝりさぐこゝふの大夫こけりがト
人ゝゝゝぐへゝて家ゝ女房こ人
渡ゝこそまゝれ車ふゝれくのゝ
いゝゝとゝてぐゝ

ゝゝ輩ゝはゝぐゝてんぐゝ人ゝ
ゝゝぐゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うけとりさせたまひて鳥羽院のけん
う安楽院のうへ入道さきのふなふ
とうのひろうんはんにうしてそん
はん初めこの御のとゝはれ源よりもとゝ
きふとゝぎすしけうきけうりとゝさ
きそをんてらはりくはりくふるこけ
あうけうの事こそとゝ申すべき
ゆきとさて御はは御師ふうをうてさい
きていとゝぞ侍られうさんあうさる
みきこれうけうとゝきうとゝれど
あうふはとけくのありけうそなの

とれうきと重藤若のはあうさ海とと
こそまうふうかうそからあうう
こうもあふ物とゝしやれすうふて
いう君のちくちうきうんとそ
きとはきんとうきちうそさうあた
つきんとゝもくしきりとゝ
さいごのちくちうとゝもしさうで
とふもかくかうきうこのふらひか
ぜんのき事はあうりうとそし
こうに神とゝぞこはうりうきあん
のさあうこのはとゝ興はうそ

まつりごとをさうしとあり
南園のうちゆきといふこゝろなり
ひとりとしたるゆへ南園
うけるけまことにひとり
はいちとくつきてこれ
一さてうんとあるくしとんよいそれ
ようもとをうてつくりのどもあり
ぬまりうてもつまこ二日よこのぐ
ごさいこせんりうかふこ
とあるべきもの作りあるもの
ふをしりけるあり
月代よひろせまこそ作けるこ
きこうこ書行朝臣のこと津
ふりつゝとまりつけて院ようけと
つまいこせこ作るふめこせこて
せこ風こよそこうこまること
てくりこ書ぬこ月のみふのりんこう
いこ海とてこてもりりれいこげか
つまちこりこ人こうあるお
利つまこもしは行はきこのそんぐ
しまこつるここりとれがこけこ
ゆこそこそこうづこうきこし

うぐひすやとくやりひさしくなりぬるとふこゑまち
ときこゆるこゑもすでにとんで
そくおがゆまきとそれをみるとあ
さをのひろれい重成にねるとふ
ゆよりいでぐるみぐとかぐてすくく
まうりそゆりうりんちすでもを
うくくこまくどもちらんでて
ひとなくさこゆせのすがをさよ山風
くこのやどばかりえの月風を
かりともいらんでこれどを風のをとな
みのゆくうりとそうすふきて

めりけうていとゆのやさやとやられ
いそてい紙平中納えうすきれていふ
ふつきれむしひりやりかられはと
るげきうんあるよそとぐこうと
やうかまこいあうちちうれいおは
ひのこいこいいうりさわくいかすく
てうせるひうろこまにとをと
げやいいい分のこてはげこうを
てあれるりひぐれつりまの巻
回いちづきみやこいこぐのよとは
げうふつけてを一えをそ仕新を

のちのすどとおぼつかなくぞおぼし
めすまゝにあんらくやうなることあるにそ
のちのきの事はいとゞきこゝろ
源氏たちの以義朝をゝ横ゝ身
信盛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しもろあるて京中ゝゝ源平
の御ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
めゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きよ[illegible]とうでいしたる天魔
のそうさをあてゝ
はぶさすらんとて
日の夕よりそひわいけう其
とう〇こうまかくしたりのうんあん
のはをとうくんとこ弟あよいはを文
ふしのそうもうあつを文白第一かう
あうはてくこゆはのうつきうはの
ゆめ孔こう新のつけあうふそて
こうせんきいれすれ
ゑうさいうはうこ二代のきいる
といへども三世しやくはうきいはうれ
りんとうけさせ給へば業障院の毎
このとゝふそて代と天魔のみて
みゆづうそうせうひうれはこう
くいあてはのくうのちくはる
あふこせすれはいるうれびきよ
こびこのてうはの大伴まるに地そた
きくこ音聞のとふはうもう
てきくはけうばこうくいあうて
世とうとうとう二人ひくあうはつ
きふ白法はこゝはるはりかり出さ

[illegible]
[illegible]
の男女[illegible]人山[illegible]国いるかぎりの
[illegible]
しきのひろうちやうに[illegible]
なごいつるのふひ[illegible]男中納言中将
[illegible]
うるいのふ[illegible]
のふ[illegible]そのうは[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふしをとりてうつくしうする[illegible]
[illegible]ていてゆ[illegible]ふあやしげなり
中ゆ[illegible]
ゐこちらこ[illegible]
とあそびて殺生家[illegible]
つもの[illegible]一月別[illegible]
[illegible]
いよく[illegible]
[illegible]
てうぐ[illegible]殿下八[illegible]
が[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

へとぎかれたる師匠ちゑ紙おいて
てその日大和といふところにはきま
ま師長ひとのでゝみ平城或都へ
変これるといつものあるぐらりん
までゆとくちよさいりうりうとち
ふめされて人あまりあるとゝとて
あんぐらりん師匠るんぐゝの稚んご
ろたなりかかつとくあるかくさい
うはばあまはゝりゝ申りひてはた
ゝこうはまどゝこれんぐゝれゝん
あんぐるゝゝんてあるみぐゝとてせい
ぐいとのひきゝとはゝさゝをのひて
ぬとあそゝげてゝぬとりゝうかう
ぐあそげゝうう
をゝくゝこのゝの蒙ゝとゝるよ
りあはゝうゝれるみすまあ
或平城まはゝれゝるぐゝれゝうゝい
まゝまぐゝれゝるゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぬりあそゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝそゝのゝりゝあゝゝそゝれゝゝる
く都ゝゝゝのゝりゝゝゝゝゝゝゝゝ
あんのさぬゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝれ

まれ月卿雲客一人もさいそくをも見ずとて公家ふ皇帝ふく
さんるゆゑにうらてうの安康
天皇けいてうにしたがひ仁天皇
はげさきんゆるやまさきなりひら
十月廿の日ふ八月の頃もぎんせのさも
をごうとばのぎさんをあざうなり
さて八月十日新院さゆきよりをも
ゆしたまひ五位右兵衛尉
ばこれちかうんくあとゆきまの屋ま
八幡宮へさてさうつゆ張れとて
屋こんさいいをうう新院さあきみ
まらをもうれ女ふとれとをもて
いふとりのうをもりたまひふ
のゆとはいさそ拙うく張ゆ家光
秋しけゆもにたさむしとに
うもしのこりやうくるうゆく
われのとこのこ分みそいこお
これとりはゆ
らをもう孫女屋こらあけてたれく
をうまうをりの事で自身ふ
けてもうかうしゆ張ゆさしひをて

しもとをのぶるみぎはにさかりあり神よ
あまりてせばなるべきみかんをこの海の
はまをといふとぞ人はいはれける
しばらくいらかうつくしくひろさわる
のこころ小敷屋といふ所なるとぞ
くりとくしてすまつの島の浦のみるめ
小松原おほ日通長といふものあり忘
れがたき世界とぞ
こんやうきけつぎをこんとうるる
らむ給ふとうけあるりてさねこん
きてはのあるとぞ弟と吹らう
ゑいをもとゆてちさかをも
どもあるれといふものをあることと
ふとれとそは生ものあ風ふれたり
ちどりさうしひたなこのこゑいりう
ふり通長世家のはの業の陸治を
ぞやろろ首のひるしちづき
てうれとゆうてうしいもふ
しやといふ生ものいそいへさう
いこれと来よりいもちをもと
て一首うきそひるしふ法
をものもをそつらとて春よ

こそとつゆをいとうとふ

あさくらやさくらのはなのちるごと

きみをまちてまちくたしつるものをさ

をしねるあるとて童のよこそを

かしこまりてしかはつてまつ

いとばしるまつのあるどのよかつるよい

つるとはあをのはをそをたく

蓮阿たちひをとをるよくそまつるれて

いとしこれるすぐるとそを

みそのの紙とをうつをれら

化国へとうけ

きりは大和国の春の夜のあけ

て天子のくらゐとゆるとあさ天皇

のをるをとこげてをりをを

うれとへとをうきを法師を

世の間をうしきを天下の事をとう

はこをうをとをひてをを

しをあををとをを春をを

ゆつけ秋の秋の立あをとをつをを

をうひをこをんをの紙をををを

あをひの月ををあをを

はををり日ををををを一

夢のゆめのごとくいつくしむ
ひとをあるようつさまをあらと
ありいとすくんかくのごとくに
ふりるのつれなひんずるをおもう
とさうぐうそれいくてうひとれと
りひたくどうのつの見ることを
すん諸仏を皆の仏に対奉仏帝
代とうぐうひとりよりもまし
ひくくどんふもてをかりし物と
西帝とばくとけくそこにまに
そのゆんとけとれてうにつくふと
こふ仏事のむうさまを地獄也
ろうこんしゃうはそそんしわらいせの
へあわしてあ新の大学注をこそ
年にあそびてはもろ四結
ひろうそふよりくうふうさまと
けあれてうと他下のそ法よりろ
しいうひりんそうあ屋れもぐふ
してきくたいゆうこのんとやと
めきいうとうくのふくと
のぎて雅方ふうあいわのこと
とうひくうぜんくあらわを

ちはやぶる月とをんで
たかくつもるさとの松ふるるん
てひてのうまいとけそいそぐき
うきやうてうてうてびせき
あさん月あつまるかてこそい
のをを勝いわ言のちいとありひあと
月をんうふあくこちのをうふ
つぐてくらんをんかうとあひ
をうのきといとりとれてけある
三笠の月とそめそう
をあらぐらりをふかんて

かいをよ新とりこそなく
山宮もはれるかねをあうくふりさ
新しあへともうきさしめりを入ち
まどをんいんひるりさしてい
てくちとをきこをんふれけう
明るもうばどを唐ちをあをを
ちあいりをんをうさい軍と
をれどもをかのせをきるれ復
をもけあるをもをれ焼をかひ
りをあをりをりをばゆうをれそを
あをいやをのをきちだ

みとをの事ハ、こんじゃくのこゑにこ
たゑうまでのかぐこさごさんあれ彼
ちくらいに大師をこゝろ(あげ)へ
あ山ちくふりうれ日本ハ大魔
まゝあらんとちくひあのくにこゝろ
ハけきとくいさゝをりひくるゆ
ちて大師のとくふせいぼとあそ
りそのちくにぐしもうれどけつめ
きゝを給ひどいさうぐゝて物のく
ちふうをりあぐあちゃうきゝん
りんちそのち長宮元年業未八

月廿六日御年宇ちてさあるさの
前年敬宮てけ弁ちかれさを
まひちう南四のうちちちとい
ちて嶮ゝて寺ちいもかう
しるあれけりいちるぐ
ちぞきゝてしけつぐあうぐと
てゆいのみぐけ京ゆて思ふ俗
ちぞけうれちあり法師中面
ちをぐうしけうぐちちうのけく
うふいりてけくゝちんてあれる
をちちうやちゝ天皇廿年一のけじ

いつまでの人々はかくてまうで
きあまたはいりてのせまうな
るとて遠国人こもをの下にゆりまし
るまうとりひきてすまそめれ神を
きがりけるふこうをうてをあうて
いくく
おりをのうをふうをしれてうを丹れ
あをてしをうくなうをふけうを姉
西門寺黄の坊ひとをりて九年
とゆをして
ようやきをしをけれむの家をて意
かくうんをうをなをあくうふ四年
ゆをうを見られはれたうこをあをでゆは
ををひうをうをゆをしれてをしを
ををうをれあをだ長宣をを二年ゆうを
にをうをいを義朝蔵人いををを
ををあうをがをうをけをををきを
うをを一門多勢をうををうを今は
も義の兵ををあひををあを
をををををををををををを
ぶいをうをあをいを独身なをうを世の
きをををうをを八郎

[illegible]てとちゆきけるぐぼうにて九国
のせいとかうしひて新羅の代よりし
たまうんと思うけるぐぼうにて信盛ぐ
命ぶんを判家員といつのおかせい
ゆえ結ぶしうきうのうりうとし
ちしうれいをまゆきあひていわう
ぐとうんとうれうのうりとおまりけるよ
うしのきいもうさしうぶ朝臣と
うけて申ちわしぐうこきびつきそい
うけう命ぶ二人ぶ家して里こう

ちきとすううこうきうふくきうとあ
つひけうぐこあり近国あう
ちにうちうして湯治とまう
羽ぶ人これとあうきあて佐治芸兼
尉主員といすのぐうきんうとんの所
ぐうりうありけうぐ余人とう
けうぐ湯屋のうちふたりくぐ足
きいうわかんまてねども通のを
つうりうたうとそけうくかう
うんて三けうとある朝たんのもとあ
ぐ海りうれいみふけきだとうん

毎夫ら人へうとうべきやうの
これどもあまたあり人数ありそれは
ものうしなどいとうて生はみそう
ぶきなんどして屋うくみめて
そうぶれて病よりとさまてちう
もちろん方こもはてうへいてそれは
うれくかうとうてそうさうどは
ようさ大事うあるひとそうあひとうさ
毎重臭(しけさぶ)あひこうて市のがり
いうへさいうて出ゆくとそうちんこそれは
神かうとうて京臭方こ屋厨かで
あうれうあ紺ハこうさすいうんと
そこさうとうう国法判官重臭うけ
ねてちんのまへとうとうとうう
よへうまとりん和とうあうこだた
のううさきこうとうあうこれかり
四人の時うもうの法師四信ぶいうう
屋あうりつぎの日義人大夫四郎うう
はかせて心りんのこぶいとたるきこと
めてのちこれは法そうきつくれ
うれどいのちといはけんすいこそ寿
こうぶきものうとうんきあうう

ぐ事さんざんにて侍ふ之ちぎりなる
みとよりずしてとんぶよさぶらひ事
を伝聞ひけるに若狭いとせうと
りのとたりけらまたうげよりそこ
とはといふるはりとみやうむで
りのふとめうんじとそ為朝ぐ申
をのひれとめうて粮ごとそ
ふはそうてこれるのせく人まあ海
うてかせけ赤間ぐこれうり
こいたるよう伊豆国大島よ月日ぬ地く
をうぐ三ちのうてたまとうこぐ

といふりのぐ舞よりそぬうりう
男子二人女子一人ありうひふとめうれ
うりうれいゆうはとうりうる
なまでも矢ぐいひとぐせりうの
ぐうりうれいおよりこれまはうこと
いすうを出うりうるの海のう
うふうりう弓矢とうあいそ矢な
屋をすてうりゆうこりぐはりう
ぬ為ば為朝ぐ申まうりう海
たりうよりぐりうとそうこの海
ハうりうの三ちんつけの三ちゆ地ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるときとうてあらしとてあるき
けるにあるいとのたばしたるを
もちげうるうるかのこしてぐう
やどやあるあるじてきてつきうて
見るとまれるとてはてるるる
ちいあり中にうけうるうだ
うりの大きに紙ぬ人のりそぎ
うるあるさまとうふ鬼神すれば
どうかうれとはがりきあの赤はし
うりはあるとそのはるのうるな
ちるうれうる毋ぞうひくんと
こうてあるとうひうる道
光あり為朝こうやうどふようげと
見てはうるあるじはりひてあまと
のまうはるあるいるのぞあんちぐ
あるうあるとうりはせいるようまて
ぐいふやうとれうはいふ心はふのとふ
あうれどいるはあるあるんん
とうるうるぞひうるうるう
して月日はるとうるいうさてな
ふはぐきうふすうるうるはるる
あるいさるるるあるとうるよ

が地くあるとうてどうとうしそ
ふあるくいとひとうそいのうちとだと
自くとうとうとうあ朝ふんぢうは
みたうぐというぐうとれうしたうう
人るたうう事ふるといふ事
うあうもあくい風ひいうひとう
とそそうとうとうるひとうとう富
ふ和ひうしもうぐうひいうとう大
るうかうもうとうして地きれう末
のうぐうというとうあうてうまを見
ふうのまくうまれうぐうどは

れいのうちとたんすうぐうしいひうれい
あふ地そ絵くしいひくかうべうとう
みけけくくふまうぐひそうう又落
朝うれ絵をうくうゆうう人年貞
とそあうふいうぐ山絵うう舟とを
ううんとういうぐうけううんうそ
ふるふうけうぐ山うくうれ
ふ鬼帝ひううあひぐてゆん
とそそ市る一人あひぐてうつあね
そのうち二年みー京ふるとうう
ううれふのうちの移んぐるおれ

屋のぎんぬ百ひをゆきあそう鬼の
ちゑといふことをくちとそかの作よ
ゆうゆうあるりそれい黄の色と
ぞうもとうはいとうしたるとう
ゆりとたんかめ今ちうとは武
光ぐ三つ三つうう毎年みはいと
うう移んぐゆそ牧うえ年ちいう為
朝ちう三つよつやうゆてあ生武光
ぐかえ移んぐとけうとべうどい
ちゑれ三郎大まちうとうゆび
して一ちうさうていかんん

とちうそ西方へ移んぐとけうちう
為移はうとうそうぎ形うる
ゆうちゆもゆそ三べうる
うけうぐかえ貢とけうする
ううれとうしごうんれそて
三郎大まとうびうゆうり
のとちゆきゆそ中のゆびと二
きうてぐうけうゆうち武光み
ちうゆあゆうばうびとうしど
ふぐそいひうぐんぜんのちわぐ
ゆびときうまるけゆうとぐや

けうとうとけみやこをものが
いくさの朔大将ときはくのあく
ぐるはけうまつりはりかりこれとな
ぐあとれてこちらひがこといそき
うんすうちうせうれえいとう
そう懐光のかうせんの河幸まいり
下居るうしをはひくはの陸
うりけう山事きりてはだち
かをのひくあえ伊豆国の長
りてしうとせむをそなると
うのふまりくに京八ケ国の海とて
せめてさいしをうかりをれ
二月廿四日ひくあ朔大将
軍ふして西国の
はけしものこもあひ
うれ山のとたるひきく伊豆国地
ちうんうそむをれをあ朔ふす
ゆあくちうびあうく和はあけばよ
神よあのとれうとうんてい
まうれれ大せいのむうそなる
しうれ一宝うもとそそ大
せいのむうよこうろくまげ和
へやうとんむうそうとうち大

のかりまたこうこうとうていそめあ
ゆこせくくまたまを毎をぐいよちぐ
きこうあ朔ゆりしかを大事ゆをよら
うとて中食(よ)をりうてうこりけりぶ
こうくくうりて廿日りうのるるり
ゆんぐいとのりふよりておりがあ
きを大のぐぐとうこりるをこる
くをのきそたなりひんるれぐよ
せこうこ八郎ありうとんそまんを
去せこんりうあぐそれりれきて
いそとことはつけけるあ朔きれひ
こそかこきかりとこうそけぐひ
こうかぐるいこうひきそひやう
どきれりりゆりそよきみこうる
の水ぎうこりあ去すこきげてて
こいうあこあこりゆをこをりな
じこいたとうこべきあ〇こうこ人
のこうぐうをこりこれをこそのこ
ア廿二〇こもはうれりこずあれ
ゆりうるゆ八こりいこぐいををん
なりひくこあくこうよりそあこ
みなこ男(うん)をとこくこをこそ

さうしろとそこなてこれをとんとくるめげ
けるあるあ朝ハ八そ井ハ井の中ちらる
うしろあてこてこうかきこうこ
なほ生るれどうしろれ
のときうそぞ
ふかうきども異
ぐうこけうハ八
ふぐめるう
いてこうか有
如くけいう
あうぐぜん

てきふとつけうのうれ
けうきうあ朝ぐこ
きこ市庵うれ
ぐうびとけて
異市ひあ
ううあ朝ぐ
こういそぎ市
そうんとうん
きこうて大病
きうこ京
てけうんあ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

保元の合戦のようきはまぐ

[illegible]

こゝろを源氏もあるべきの事ふ

をとられて方々なりあの

ひら[illegible]ふりわけいのちをとる

[illegible]

このこゝろをもりうもとこ

[illegible]

保元物語下終

阿波国文庫